

田中さんの背中

蟻 川 謙太郎

(総合研究大学院大学先導科学研究科)

私が文理学部生物学教室の助手になって約半年後、私より5歳年長で30歳をちょっとすぎたくらいの若々しい助教授が赴任していらした。田中一朗さんである。私が市大に在籍した21年余の間に、文理学部は理学部に、さらには国際総合科学部へと組織はずいぶん変化したが、この間ずっと田中さんと私は理科館5階で軒を並べていた。軒を並べていると廊下で顔を合わせる機会も多い。壁の向こうからは田中さんが動く気配も感じられる。たぶんそのせいで、私は田中さんをととても身近に感じ、勝手に田中さんを兄のように頼り、かつ慕っていた。田中さんの背中では、私に色々なことを教えて下さった。退職記念号の論叢に原稿を書いてほしいというメールをいただいたとき、私はとてもうれしく思った。田中さんも壁の向こう側から私の気配を感じ取り、いくらかでも近い気持ちを持っていてくださったからかも知れないと、これまた勝手に喜んでいる。

板書はていねいに

田中さんが市大で初めて学生の前立って挨拶をされたとき、私はなぜかその場に居合わせた。「体も小さくて頼りないけれど、云々」と、大きな声ではっきりと自己紹介をされた。頼りなさなどみじんも無い、たいへん立派なご挨拶だった。読みやすい几帳面な文字で板書もされた。板書はうっかりすると、さっさと書こうとするあまり乱雑になってしまうものだが、田中さんは早すぎず遅すぎず、絶妙な早さでわりに大きな文字を書かれた。横線から縦線につづく画では、その曲がり角を習字の筆のようにチョークを使って書く独特の筆法も、非常に印象的だった。なるほど板書はこうすれば読みやすいなと思った。書かれた内容は忘れてしまったのだが、田中さんは就任早々、私に「板書はあわてず、ていねいにすべし」と教えてくださったのだった。

田中さんの体が小さいことについては、何年かしてははっきりと認識する機会があった。当時、市大教員の健康診断は金沢区役所で行われていた。ある年、その健康診断に田中さんと2人で連れ立ってでかけたことがあった。私が先に身長と体重をはかり、田中さんがそれに続いた。後でご本人から聞いたことだが、体重計に乗ったとき田中さんは係のひとに「まじめに乗って下さい」と叱られたのだそうだ。80kg以上あった私のあとだっ

たからか、田中さんの表示が不自然に小さく見え、なにかズルでもしていると思われたのだろうか。考えてみれば失礼な話である。そういえば田中研究室の女子学生が「座ってレバーを上げるとシューっと下がる椅子があるでしょう？ あれ、先生がやっても下がらないんですよ！信じられない」とふくれていたこともあった。

学生指導は誠意をもって

体の小さな田中さんはしかし、私にとってはとても“大きな”存在だった。当時の文理学部生物学教室では、ほぼ全学生が卒業研究を履修していた。4年生は各研究室に配属されて卒業研究を行い、その成果を卒業直前の2月ごろに発表する。すべての発表を聞いたあと教室会議が開かれ、それぞれの学生について全教員が講評し、成績をつける。田中さんが赴任された年、田中さんの遺伝学研究室からも3～4人の学生が発表して、それがどれも大変素晴らしかった。教授のお一人が学生たちを褒める発言をされると、別の教授が「それは田中先生の指導が素晴らしいからですね」とおっしゃったのである。

以来私は、誠意をもって厳しく指導すると学生はそれにきくと答えてくれるに違いないと信じて、学生指導に当たってきた。それが功を奏しているのかどうかはともかくとして、この信念は揺らいだことがない。それは、学生に恵まれたこともあるが、やはり隣にずっと田中さんがいらして、背中で私に教え続けていて下さっていたことがもっとも大きな要因だと思う。

写真に妥協は無用

田中研究室から出てくる発表でいつも感心していたのは、顕微鏡写真のクオリティの高さである。研究の経験が浅い4年生がとっているのも、もちろん人によって多少の差はあったが、とくに蛍光顕微鏡写真はため息が出るほどに美しいものがあった。私が所属していた動物生理学研究室の故江口英輔先生は電子顕微鏡の大家だったので、標本の作り方、写真の撮り方、焼き方、見せ方の基本はまず江口先生から徹底的に教えていただいた。しかし江口先生とは蛍光写真を撮影する機会はほとんど無かった。

後年、私自身の研究に落射蛍光顕微鏡を多用するようになったとき、私は田中さんに教を乞うた。フィルムの選び方や露出の決め方をひとつお教えいただいたあと、私は自分で撮影したチョウ複眼の標本の写真を田中さんにお見せし、何度か講評していただいたのである。絞りや露出についてその都度小さな改善点を指摘して下さった。そのとおり実行してみると、自分では気づいていなかった部分が修正され、写真のクオリティは少しずつあがっていった。「いい写真を撮ろうと思ったらきりがいいよね」とおっ

しゃったことはよく覚えている。納得のいくまで標本を作り込み、さらに写真を極限まできれいに撮影して、初めて見えるものがある。そういうことに、江口先生から田中先生へと続いた“写真修行”を通して、私は気づくことができた。

しごとにはメリハリ

研究には時間がかかる。長い時間をかけなくてはよい研究はできないが、長い時間をかけたからと言ってよい研究になるとは限らない。やはり、本当に働くべき時には徹底して集中し、それが終わったら心をぱっと解き放つ時間をもつことが重要だと、私は思っている。心を解き放つことは、いままで集中してやっていた研究を少し突き放して見ることにつながり、そういうときに新しいアイデアが出てきたりするものだからだ。

私は田中さんの「心の解き放ちぶり」を尊敬している。その真骨頂が研究室の愉快的な宴会である。忘年会、発表会打上げ、卒業祝賀など、私たちはよく理科館の部屋で宴会を開いたものだった。研究室が隣同士だと学生同士も仲良くなり、宴会は相互乗り入れが常態化していた。たまに酩酊されることもあったが、田中さんは学生とのこうした宴会をとことん楽しんでた。宴会をけじめとして、しごとにメリハリをつけていたのだと思う。わたしはどうもそのメリハリのつけ方がいまだにうまくない。これは真似ようとして真似られるものでもないようで、いっこうに改善の兆しはない。尊敬すると同時に、田中さんが上手に心を解き放つ才能を、とてもうらやましく思っている。

お酒がらみで心底がっかりしたこともある。理科館でものが無くなる事件が相次いだときのことだ。ある朝出勤した私は、デスクのまわりの様子がなんとなくおかしい、と思った。気になって調べてみると、机の引き出しの中から、海外出張のときに残った外国の紙幣を入れていた財布が消えていることがわかった。急いで隣の田中さんの部屋にいってみると、彼は机の中からビール券の束が無くなっていると、青くなっていた。こっちはこっちで被害を受けていたので、お互いに慰めようもなかった。2人して怒り、そして深く落ち込んだのである。

途中で万が一のことがない限り年齢は誰にも平等にやってくるもので、まずは田中さんがこれまで無事にご活躍されてきたことを、心からお祝い申し上げたい。エピソードは記憶をたよりに書いたもので、細部は事実と違っているかもしれないが、それはお祝いということでご容赦いただきたい。自分の定年はまだまだ先だということにして敢えて考えないようにしてきたが、それもそろそろ限界のようだ。よい準備をするためにも、

田中さんが定年後にどのような生活を考えていらっしゃるのか、近いうちにゆっくりとお話を伺いたいものだと思っている。